

文化

うおずみ千尋さん



福島県いわき市出身で金沢市在住の盲目の詩人うおずみ千尋さん(六九)が六年ぶりに第六詩集「白詰草序奏—金沢から故郷・福島へ」(コールサク社)を出版した。東日本大震災による原発事故で「故郷が自分にとっていかに大きな存在だったかを思い知らされ、がくぜんとした。自分の中の色彩感覚は故郷にいたころに得たもの」と話す。みずみずしい感覚にあふれた詩句は、故郷を思う心情とともに、「見ること」の本当の意味を問いかける。

(松岡等)

「白詰草序奏—金沢から故郷・福島へ」出版

金沢市を流れる犀川のほとりのシロツメクサの香りが、幼いときに故郷でかいだレンゲソウとシンクロする表題作の「白詰草序奏—金沢から故郷・福島へ」。震災以前に書いたという作品で、原発のことには直接は触れられていない。しかし、当初は「故郷」としていただだけの副題に、編集段階であえて「福島」という地名を入れた。

「福島は田舎でしょ。だから以前はその出身だということとを口に出せなかった。でも今は違う。胸を張って福島県出身だといいたい」。震災後、「人生観が変わった」と言い切る。

高校を卒業し東京へ。結婚して愛知県に住んでいたころに、自らが徐々に視力を失う重度の緑内障だと分かった。金沢市に住まいを移し、夫を

音声に変換するソフトが入ったパソコンに向かううおずみさん＝金沢市内で



亡くすのと視力の衰えが重なった。五十代半ばで「二

美しい色の福島が好き

盲目の詩人が問う「見ること」

人で立っていくしかないと思った。

視力を完全に失う前に、必死でパソコンを覚えたと。「こんなに勉強したことはないくらい。一週間で画面をイメージできるようになった」。今は音声ソフトを頼りに自在にパソコンを扱う。

詩集には、詩誌などに発表した三十二編を四章に分けて収録。光や色といった視覚を扱う詩も多い。

旅先の礼拝堂で出会う青年の助けで十字架の足に触

空と海、田の水面や黄金色の稲穂…。もし都会のビル群に囲まれていたら灰色ばかりだったかもしれない」と話す。

詩「魂が駆ける場所」はストリートに原発事故をテーマにし「リアリズムで書いた」。ヒロシマ、ナガサキを経験してなお、核の平和利用の末に起きてしまった事故を「これが夢? / これが平和?」と。それでも遠く離れた故郷を思い、「広い広い空でした / 碧い碧い海でした / 真っ白な砂

れる経験を描いた詩「歌う」。 「知っていたのですね あなたは / 視力を喪った者にとっては / 触れる事が / 見る事 なのだ」と云う事を」。続く詩句から、うおずみさんに、長崎・五島の海と、ステンドグラスに反射する色彩が鮮やかに感じられていると知らされる。

「原発事故で自分がどれだけ福島が好きだったのかと思ひ知った。失明しても色彩感覚を失わないのは、子どものころの総天然色の自然に恵まれたから。青い

丘が続いて深緑の松林が繁 / わたしが生まれ育ったところ / 静かな海沿いの町 / 魂の還る場所でした」と。

原発事故が人々からいかに多くの物を奪ったのかを、読む者はあらためて痛感させられる。詩集のあとがきにうおずみさんはこう書いた。「核災害の凄惨さと酷さに私は呆然と立ち竦みました。けれども取り戻さねばなりません。生きる希望と勇気をそれぞれの胸に」

B5変型判、千五百円(税別)。